

審議会等の会議結果報告

1. 会 議 名	第 22 回 松阪市政推進会議
2. 開 催 日 時	令和 3 年 5 月 14 日（金）午後 3 時 00 分～午後 5 時 00 分
3. 開 催 場 所	松阪市役所 議会棟 第 3・4 委員会室
4. 出席者氏名	<p>出席委員：岡山慶子委員、門暉代司委員、酒井由美委員、高島信彦委員、西村訓弘委員、三井高輝委員、村林守委員、米山哲司委員、渡邊幸香委員</p> <p>欠席委員：梅村光久委員、辻岡宜子委員、西川明樹委員、平岡直人委員、松浦信男委員</p> <p>事務局：竹上市長、山路副市長、永作副市長、岡本企画振興部長、藤木企画振興部経営企画担当参事兼課長、小川企画振興部経営企画課政策経営係長</p>
5. 公開及び非公開	公開
6. 傍 聴 者 数	1 人（内、報道関係 1 社）
7. 担 当	松阪市企画振興部 経営企画課 TEL 0598-53-4319 FAX 0598-22-1377 e-mail kei.div@city.matsusaka.mie.jp

・議事録は別紙のとおり

第22回 松阪市政推進会議 議事録

1. 日 時 令和3年5月14日(金) 午後3時00分～午後5時00分
2. 場 所 松阪市役所 議会棟 第3・4委員会室
3. 出席者 岡山慶子委員、門暉代司委員、酒井由美委員、高島信彦委員、西村訓弘委員、三井高輝委員、村林守委員、米山哲司委員、渡邊幸香委員
※欠席者 梅村光久委員、辻岡宜子委員、西川明樹委員、平岡直人委員、松浦信男委員

〔事務局〕竹上市長、山路副市長、永作副市長、岡本企画振興部長、藤木企画振興部経営企画担当参事兼課長、小川企画振興部経営企画課政策経営係長

1 市長あいさつ

あらためまして皆さんこんにちは。市政推進会議について、この会議は、皆さんのお知恵を拝借しようというところから始まっている。私も役人、議員、経済人を経験して市長になったが、市の施策を作るのに役人の発想だけではどうしても無理があると感じた。いかに新しい発想を取り入れて行政を動かしていくかというなかで、皆さん方のお知恵を拝借し、実現していく。そうすることによって役所の職員にも気づきが出てくる。新たな展開が出てくる。

例えば以前の市政推進会議では、『市長はいろんなところで懇談会をしているが、すでに市のために一生懸命に市民活動をしている団体がある。それらと話し合いをするのが一番大事ではないか。』という意見があった。そこで早速3月からその話し合いを始めた。市民活動団体の方々の発想は私にとって新鮮で、単なる要望ではなく“こんなことを一緒にやりたい”といった意見が多かった。そのなかで良さそうなものは担当部局にも話をさせていただいている。

今日は令和3年度予算についてご意見をいただくが、それだけに限るものではない。コロナ後は必ず世の中が変わる。その時に向け、全国に先駆けてこんなことをしてはどうか、こういうことが有効ではないか、といったご意見を皆さまからいただくのがこの会の主旨。積極的なご発言をどうぞよろしくお願いします。

※松阪市政推進会議規則第5条により、会長が会議の進行を行う。

○ 会議の公開・非公開の決定 会長)

みなさんあらためましてこんにちは。本日が通算22回目ということで、今日も闊達なご意見をよろしくお願いします。

まず、会議を始めます前に公開・非公開を決めたいと思います。本日の議題は「令和3年度予算について」ですが、前回と同様に公開ということによろしいですか。

(異議なし)

会長)

ありがとうございます。では、本日も公開で進めてまいります。

2 協議事項

1) 令和3年度予算について

会長)

では協議事項に入ります。「令和3年度予算」について、まず市長からご説明をお願いします。

(市長より資料の説明)

資料 令和3年度松阪市の主な取り組み

委員)

子育て支援の現場の声として、超延長保育などは助かる親がたくさん居るのではないかと。預かり保育については、どうしても未就園児等や未就学児に集中してしまう。私は松阪市に転入してきた母親のため、近くにすぐに頼ることができる人がいない。小学校から帰って来た子を、今日も無理を言って預けてこの会議に出席している。働きたいし、この会議にも出たいが、子どもも帰ってくるため、母としてはつらい状況。未就学児のサポートは行き届いているが、小学生で学童保育に子どもを入れていないフリーランスの人や、時短で仕事をしている人がこの時間に働きたいを思うと、預け先がなかなかない。

コミュニティセンター化が地域支援事業として重層的支援をしていただけるのであれば、このコミュニティセンター化の取り組みに、市に転入してきた母親のサポートを入れていただきたい。今までは独自に集まる場を設ける必要があったが、元々地域にある市民センターがそういう場になるのであれば、例え有償でも、子どもたちを少しの時間預らせてもらう場ができる。人が入って行きやすいことで交流が生まれたり、どんな人が地域に居るかなどを知る良いきっかけになるのではないかと。転入してきた母親のサポートというのを入口にしなから、地域活性化の糸口にしていただくなど、チャレンジをしていただきたい。

市長)

学童保育は今いろんな形となっているが、最終的には公設公営にしていきたい。今は市役所が建物を建てて運営は保護者がする公設民営。保護者は社会福祉法人に委託してもよい。今学童保育は40くらいの施設があり、約3分の1は社会福祉法人やNPOに委託など年々委託は増えている。保護者会で運営することは非常に大変。時間はとられるし、これまで保育園でできていたことが学童ではできなかつたり、なかなか難しい。意見を聞くと、今までより多少お金が高くなっても公設公営が良いという意見が多い。ただ、一番の問題は受けてくれる法人がなかなか見つからないというところ。今、様々な法人にお願いしている。それも保育園ではなく介護をしている社会福祉法人。保育園ではただでさえ保育士が不足しているのに学童まで手がまわらない。そのため介護職にお願いしている。

委員)

私もコミュニティセンター化に期待している。課題解決のためのコミュニティセンター化として位置づけをより強く出していただき、その担い手も明快にしてもらおうと良い。ただ、市民が運営していくため、多様なセクターを繋ぐ力のある職員を数年配置することが必要。つまり産官学民の様々なセクターに提案営業ができる職員が、企業や地域の人々、学校に対し、“こういうケースなら使えますよ”促していく。逆に“だれが利用していないか”というのもチェックし、いろんな人が利用したかどうかを成果指標とするのではないかな。いずれは市民が自ら考えて動ける、主体的な地域づくりとなることを期待しています。

市長)

少し耳の痛い話。コミュニティセンターには行政だけでなく、いくつかのところをセットにしていく必要があると考えている。行政の一番の弱点は、異動があること。今の市民センターの職員は大体4年で異動していく。市民センターは言うなれば職員の登竜門的なところ。市民の皆さんに直接対応していくことを学んで、また市役所に帰ってくるようなところがある。そういう意味もあり一人を長い間そこに置いておくこともできない。

ただ、地域の歴史を分かっている人も必要。自治会の役員さんなど人が変わっていくので、持続性を考えると地域の核になる方に応援をいただくことが必要と思うが、これからこれらのことも含め、制度設計をしていきたい。

委員)

市内にコミュニティセンターは何か所くらい、どういう場所にあるものなのか。

市長)

今松阪市内には市民センターが21、公民館だけというのが本庁管内で4つ。拠点としては25くらいの建物がある。まだ未定であり、これからの議論にもよるが、それら全部

をコミュニティセンター化するのではなく、ある程度まとめていく必要があるのではないかと考えている。

委員)

少し違う話になるかもしれないが、一般的には市が予算を持ち、市が実行していくのが行政のやりかた。ところが予算が減り、ニーズが多様化したことで一律にはできないことが増えた。そのため、市民の皆さんに対する支援のやり方を変えなくてはいけないというのが大前提としてある。

その時に、委託のような形で市民に渡していくのかということ、先ほども話のあった委託先が無い場合もある。その場合、変な言い方にはなるが“認めて行く”というやりかたもあるのかなと思う。

例えば、子育てで子どもを預かってもらうのは無理でも、おばあさんが公園に座っているだけでも安心できるということがある。それだったらそのおばあさんを、町として“認めて”あげる。そうすると、そのおばあさんは、誇りを感じて夕方2時間座っている、そうすることにより堂々と子どもの面倒を見られるようになる、ということ。これが利用できるかどうかは別にしても、これは実際ある町の会議であった。

同じように、お互いが知り合いではなくても、子どもを隣のおばあさんが“いつでも預かるよ”と言ってくれるなど。こうした人の繋がりや善意を公で認めて行くというやりかたも手法としてはあると思う。

もう1点、桑名市では市の予算では全く採算に合わない竹やぶ処理を、リタイヤしたおじいさんの集まり「桑竹会」がすることにより、竹やぶがきれいになるなど、趣味のような人とうまくかみ合うことによって問題解決になった。お金では解決できないことが、市の活動として堂々と認めることでできた。その活動は広がりを見せ、今はたけのこや竹を使いたいといった事業者から申出があったりする。“認めて行く”という活動を束ねるだけで、その延長上には、本来市が予算をかけてやっていたようなことがお金をかけずにできる。

コミュニティセンター運営の際も、そうした「手法の幅」をどこまで広げるかを市として考えてはどうか。直接的な話ではないが提起させていただいた。

市長)

言われたように、これからの時代は行政だけでやっていくのは難しくなってきたというのが前提にある。そうなるといかに地域と協力していくかということ。ただ役所の持つデータはほぼ個人情報なので、その扱いをいかに上手にクリアするかが問題。しかし実際に困っている人はたくさんいる。地域では民生委員が居て、独居老人の見守りを行っている。でも本当は子どもたちのことや、生活困窮の方、ひとり親世帯、特にコロナでサービス業に努めていた非正規の人々は解雇されており、明日からどう生活していこうという人

も多くいる。そういった部分の相談ができていないか非常に疑問。まずそうした対応をしていくことが重要。

その方法として、“市民センター”という形で“待ちの行政”をやめて地域に任せ、空いた人員で、相談体制に充てようという発想。そこだけでは足りないから、先ほど言われた“認めていく”というのは必要と思う。それをいかに上手にミックスさせていくのか、地域性も加味しながら、まずはモデル的にやってみようとしている。これこそ公民連携ということになるのかもしれないが。私たち行政だけでは成り立たないということは確か。いかに皆さまと協力して問題を解決していくかということが課題と捉えている。

委員)

コロナで一番大きく変わったのは働き方。コロナ禍になって一気にリモートに変わったが、結果的に分かったことは、“できる”ということ。今までは原則出社だったものが、今後リモートワークを是とする前提の働き方に変わっていくと思う。これはワクチンが普及した後でも元には戻らないだろう。働き手からすると働く場所を選べるようになったわけだが、すると田舎、地方、自然を求める首都圏の人は何を基準に選ぶのかということになる。なぜ松阪なんだろうというときに、一つ思うのは先ほど委員が言われた“子育て”や“コミュニティセンター”など、これはブランドとまでは言えなくても、選択する重要な要素となり得る、候補に挙げやすい市になるのではないか。

他市では老人ホームを地域の子どもたちに開放し、そこで老人と子どもたちの交流が行われるという例もあった。遠くの親戚より近くのコミュニティ。そういうニーズは親にとってもあるだろうし、そういうところをコミュニティーセンターが担っていければ非常に面白いのではないか。

委員)

近しい人に小津安二郎の熱烈なファンがおり、小津安二郎松阪記念館のことを非常に喜んでいる。専門の学芸員資格を持った研究員を置いたのは、おそらく市では初めてのことで、大変期待している。気になるのは展示された資料、展示物のほとんどが借りものであるということ。特に小津安二郎の資料や映画関係の資料はどちらかと言えば個人のコレクターが持っているケースが多い。今後研究員の方が企画展を計画する際に、歴史民俗資料館では防災面や温度管理などの面で展示環境があまり良くないという点もあり、残念ながら資料を借りることが難しくなってくる。そこで、できれば市で小津安二郎の資料を購入することを考えてはどうか。さらに鎌倉の文学館などに協力いただきレプリカ作成を検討してはどうか。レプリカなら常時展示できる。そうしないと企画展が難しいのではないかと思う。鎌倉、尾道、蓼科などの館と協力、連携して企画展を充実し、小津安二郎松阪記念館を小津安二郎のメッカとして発信していただきたい。

市長)

資料で言うと飯高の資料館にもかなりの量がある。飯高まで行かれる方が少ないこともあり、ある程度資料を入れ替えていこうかという話はしている。軌道に乗ってきたら、企画展もできるのではないか。もう一つはどこに価値見出すのかということもある。小津さんが活躍した時代は戦後から20年くらい。歴史民俗資料館にはその頃の昭和の時代の生活道具が展示してあるが、同じ昭和のものでも小津記念館として見ると、不思議と作品の時代背景の資料展示として見えてくるという気づきがあった。そうした見せ方も良いのではないかと思う。レプリカはほとんど本物を作ることになるので、素材の調達など高価になるなど難しい面もある。

委員)

映画のワンシーンで出てくるような一般家庭の風景の再現は非常に大事で面白いと思う。展示の横に映画のワンシーンが映像で流されていけばイメージが湧くのではないか。レプリカについては高価なものではなく、小津映画のチラシやポスターなどは比較的安価と思う。著作権の問題もあるが考えていただければと思う。

委員)

出会いサポート事業について。今結婚で挙式や披露宴をしない人が増えているが、その人たちは社会的つながりを求めているというお話です。

コロナの後で何が大事になったかということ、社会的つながりを新たに作りたいという人がたくさんいるということ。社会的な孤立をさせないことは大事なことです。世界幸福度調査でも「経済的な事」、「健康の事」、「自由な生き方」よりも「社会的つながり」がすごく大きな位置を占めているという結果が出ている。では、どのように具体的な社会的つながりを作っていくかということ、若者たちが何か自分の縁のあるところで、「結婚の時だけでもそこに行きたい」「そこでつながりを持ちたい」というニーズがとても高いのではないかと私は思う。

よく社会的つながりというと血縁や地縁などがあるが、何か新しい生活をスタートする結婚という時に、もう一回自分の故郷につながってほしいという人が、松阪に今住んでない人で、若者の中にもたくさん居ると思う。

資料の「出会いサポート事業」は、今松阪に住んでいる人に松阪の良いところを発見してもらおう、という主旨かと思う。だが、若い人に新しい社会的つながりをつくるという意味で、結婚を契機に自分の縁のあるところに何かアプローチをしたいと思っている人に対し、そこに“縁”を作ってあげるのも大事ではないか。

いろいろデータを見ると、“結婚をする”という新しいスタートの場面で、自分の社会的つながりはどこにあるんだろうかとか、これからどうやって生きて行くんだろうかとか、みんな考えている。若い人たちは特にそうだし、コロナ禍でさらにそういう傾向もある。そのときに「ああ、私は今は離れているけれども、この町のこの小学校出身なんだ、そういうところに縁があるんだ」ということを考えることが若者なりにあるのではないか。そ

ういう人たちに、離れてはいるけれどももう一回縁を作ってあげたい。あまり他ではやっていないと思うので松阪でできると良いなと思う。

市長)

今の話は私も納得した。分かりやすい話と思う。松阪を離れて新しい人生をスタートさせる機会に縁をつなぐということ。あとはどうやってやるのかだが、つながりができるのはすごく良い。

委員)

例えば、「縁をつくってあげる」という精神的なつながりを持ってくれる人材も居るのではないかと思いますし、あるいは結婚と言うことを契機にすると、例えば HP 等で「結婚で社会的つながりをつくってさしあげられるので、松阪で挙式をしませんか」あるいは「二人の記念をここでやりませんか」ということをしてあげれば、それからずっといろいろなライフステージごとに戻ってくる。小学校の時から戻ってないかもしれないが、気持ちがつながるところがたくさんできるのではないか。企画としてはかなり具体的にできるのではないかと思う。

会長)

今のお話で、例えば松阪に架空の婚姻届けを出すような取り組み。三重県が“渡会県”へ住民登録する取り組みを行っているが、それを松阪と縁を結ぶような、婚姻届けのようなものを出し、5年10年の節目に「おめでとうございます」といったメッセージを送るとか、結婚したときも何か送るというイメージでお聞きしてました。

委員)

ふるさと納税の例もあるが、何かの形で「ここで人生のスタートを切ることを、いっしょに松阪市も応援します」ということ。他にもたくさんのができるのではないか。あと一つ、こうやってつながりをつくっておくと、若い人たちが松阪に本当に何度も通ってくれるようになって、経済的にも活性化する、何か欲しいと思う時、松阪のものを使おうと思うようになってくるでしょうし。私は、ここに1つの故郷があるというふうに、思ってくれる若者が、松阪に来てくれたり松阪とのお縁をつないだりするという可能性が高いのではないかと思う。もしかすると、直接縁がない人でも松阪とつながりたいと思う若い人もいるかもしれない。若い人に話を聞くと、何か新しい社会的つながりを欲しがっているが、都会のなかでそのつながりを作るというのは、難しいと思っているような節がある。「あ、そうかあそこつながれば、こういう心のつながりもできるんだ」あるいは「物のつながりもできるんだ」「人のつながりもできるんだ」というようなことを、具体的に化したらと思います。

委員)

松阪に来て、何かのイベントに参加して、それをきっかけにしてこちらから発信をして、つながりをキープして、何かあったら戻っておいでというようなのができると。何かものをつくるというのでも良いでしょうし、何か最初の仕掛けがあって、それをきっかけにずっとコミュニティ、関係を維持させていく、発信していくというのは面白いなと思います。

委員)

結婚式を挙げないという若者がこれだけいるなかで、なにかが心にすごく引っかかるのではないかと思います。なぜ結婚式を挙げないかということは、もちろん経済的なこともあるが、「なるほどこういうことができるんだ」ということが若者たちの心を掴むと思う。特に『松阪』というところには、そういう力があると思います。あの『松阪』の人とのつながりとか、心のつながりとか、歴史の中に自分も加わることができるという魅力があるのではないかと。結婚という契機にそれができるのではないかと思います。

市長)

今のお話は良い示唆をいただいたと思う。いちどいろいろ考えてみたい。どういう仕掛けをするのがみなさんの心に最も響くのか、仕掛けについては、仮想住民や婚姻届もあるが、もう一步踏み込む何かがないか考えてみたい。

委員)

データも集めており、若者への聞き取りもしているのでまた協力したい。結婚に関して言うと、コロナが明けたらこうしようと思っている人たちも居る。具体的などという仕組みをするというのは私も考えてみます。

委員)

事例としてあるとしたら、紀北町では釣り堀婚活などしている。カップルになったら紀北町の祭りの中で結婚式を挙げるということをしていた。あと、お伊勢さんで結婚式を挙げられるプランもあった。松阪で結婚式を挙げられるんだというのを1つのキャッチフレーズにして、普段では絶対に使えないような場所を結婚式のために開けてくれるとか。お伊勢さんなら“ここは絶対に入れないような場所”というのを使うというのもある。

もうひとつ別の話として、先ほど委員が言われていた働き方の変化が定着するとなると、例えば、伊勢におじいさんが住んでおり、もともとそこには住んだことはなく、東京でずっと働いていたが、“どこで働いても良い”と言われたので、おじいさんの家に行って働いている。その場合に何が起きているかという、「何か伊勢でできることはないですか」ということを言われた。つまり、これからもしかしたら地元から出て、こちらへ戻っ

てきている人が居て、その人たちが地域のコミュニティを探すようなことは、実は潜在的にあるのではないかということ。

確実に居るのは大学生。大学生は、本当は東京の大学を受かっているけれども、行かないでここにいるというケースもあるし、東京から戻っているかもしれない。いろんな大学に通っている子たちを松阪のどこか1か所に集めて勉強をさせても良い。密にならないような場所でヴァーチャルに“松阪の大学”をつくり、“松阪の大学”に通っているが実は様々な大学の学生が居る。リモートになるとそんなことが可能になる。

リモートワークしている若者が松阪に居ないのか、松阪に来れる人たちが居たら、そういう子たちを戻せる方法はないのかどうか。その子たちが来た時に“こんなことができる”という場を何か考えてあげたら自然と人が集まって来て、出会い的なことが起こるのではないか。すこし派生したがそのようなことを考えました。

委員)

どうやってこの困難な時代を生きて行くのか不安を持っている若い人はたくさんいる。そこに社会的つながりを新しくつくってあげる。しかも「松阪市」と、結婚というテーマも結び合わさって、もちろん働くということも入れればもっとすばらしいかもしれませんが、このような取り組みを継続してできればすばらしいこと。

委員)

不妊治療について。治療は高額となるが、少子高齢化の時代に、「人口を増やす」といった掛け声はあるが、バックアップするメニューがないのでは。松阪市独自の制度をつくれれば良い。そうした制度があれば心が温まるし、それによって「松阪に帰ってきてください」ということにも繋がるのではないか。

市長)

不妊治療の松阪独自の制度はあります。国の不妊治療への制度は最近大きく変わっており、1回およそ30万円、6回まで補助と言う制度となっている。そこに金額上乘せという制度を作っているところが多いが、松阪ではその6回という回数を2回分追加するという補助制度を5年ほど前に作った。またこの4月には一般不妊治療も補助していくようにするなど、少しずつではあるが進んでいる。

委員)

そういう“松阪らしさ”がでる制度をつくりもっと効果的にPRしてはどうか。あと、飯高管内の移動手段の検討について、地元の意見を聞いて検討に入っているのか。

市長)

現在は、まず業者の選定をしているところ。こういうものはどうしてもコンサルタントが必要で、かなり総合力がないとできないという認識。

今は買い物や通院も大変という状況がある。2年くらいかけて“こういうやり方をしたらもっと効率よくなる”というのを、地元の人意見もいれながら検討していく。例えば飯高地域にはタクシーがない。コロナ対策でタクシー補助している自治体はたくさんあるが、松阪はそれができない。なぜかというとなんや飯高にタクシーが走っていないから。それを解消できる方法がないかということも含め、地域の人意見も聞きながらこのような検討を行う。

手軽な移動手段としてタクシーは一つの有効な手段だが、飯高管内も広いためお金がかかるという問題もある。そうした点をどのようにクリアしていくかなど、いろいろな方法をこれから研究し決めていく。

委員)

市の経費削減ということもあるのか。

市長)

これは、これから必ず全市に関係してくる話。市も1億以上のお金を入れているけれどもほとんどの市民は地域の公共交通に満足していない。どこに問題があるかという不便だから。特に飯高では実質的に通院や買い物が不便。飯高にコミュニティバスが走っているが、「1年間にかかっている経費」を、乗っていただいた「延べ人数」で割ると、一回の乗車で4,000円かかっている。いただいている料金は100円。経費を削減するのではなく、『同じお金をかけるのなら、もっと効率良いやりかたがあるはず。』という視点にたち、それをどうしたら良いか、というのが今回の事業の主旨になる。

委員)

住民自治協議会の件でもそうだが地元の意見が大事。あと事業の内容について、地元の人知らないのではないか。PRも大事と思う。

市長)

地元の意見が大事という話もすごく分かる。“自分たちがこの計画を作った”とか“この制度は自分が作った”というとき、すごく大切にす。ただ、地元の人たちだけで考えるのは難しいので、選択肢を示してあげるといったやり方が必要。そういったことをやっていけば良いと思っている。

PRについて、知らない人はまだまだたくさんいらっしゃると思うので、きちんとお知らせしながら進めていく。

委員)

コミュニティセンター化について、他の委員のみなさまからもいろいろ考えていらっしゃると感じた。私たちも公民館でできることを日々考えているところ。例えば、和室を小学生に開放して見守ったり、小学1年生の子たちの下校を見守ったり、年配の方からも、「ずっと家にいて辟易している。私たちに何かできることはないか」といった声をいただいております。地元の方が講師としてフルーツ大福を作り、在宅老人に持っていくなどしている。今日も、小学生700人分の「バンブー明かり」用の竹を持ってきていただいたり、朝からおばあさん方が漬物を一生懸命作ってくれたりとかしている。

とにかく年配の方も若い方も、居場所をつくって欲しいという声があるものすごくあり、何かしたいことがあるとか、困ったことがあるとか、何か思ってみえることがあったら、なんでも良いのでとにかくお声を聞かせてくださいと皆さんに発信している。

公民館活動は規制が多いが、このような状況で少しでも気晴らしができるようにと、少人数でいろいろ活動している。地域も頑張っているのも、もっとみんなが使いやすい施設に変わっていったら、公民館に居る側も嬉しいし、コロナのようなことが起こってもいろんな方の“居場所”となれるのではないかなと思う。

市長)

公民館は、社会教育法に位置付けられた組織で物販、飲酒、営利目的をもった活動はできないとなっている。そのためそうした制限をはずせるよう検討をしている。都会では“道路占用”の制限が緩和されたりしているが、税金で建てたものであれば、基本的にはほとんど使ってもらわなければならないと思っており、コミュニティセンター化もその一環。元々公民館や市民センターである建物を地域で管理してもらうことで、より皆が使いやすくなる方法を考えている。

委員)

資料には小津安二郎と松浦武四郎記念館について書かれているが、今度鈴の森公園に市独自の収蔵庫を建設いただく。こうしたものは県下の市町ではやっていないし、全国的にも独自の収蔵庫は珍しいと思う。そのため“松阪はすごい”とよく言われている。何を入れるのかについては、小津家、長谷川家のものが中心となると思うが、ぜひ昭和の合併当時の旧村単位の出張所の明治、大正、昭和の行政資料の保存も考えてもらいたい。行政資料と言うのは年限がくると廃棄されていくが、行政資料もあと50年すれば一級の歴史資料となる。三重県はそれに先んじて県の総合博物館に保存され一部公開されている。松阪市も全部は大変だが、重要なものだけ選別しながら残していただくことが大事かなと思う。実際資料を探そうと思っても探せないこともあり、それらはおそらく処分されたのではないかなと思う。ぜひともお願いしたい。

市長)

収蔵庫を建てるきっかけは、長谷川邸の蔵のものを外に出さないと蔵が利用できない、というのが大きな理由。だがもう一つは、ある方の話がある。「この町にはたくさんの美術品があり、いろんな絵画を所有している人が居る。そうした個人収集の美術品、歴史資料などはその個人が亡くなると、売却するなどその土地から出ていってしまう。だから、物にもよるが良いものは松阪市でもらってあげて欲しい。そのためにはちゃんと温度管理のできる収蔵庫、蔵をひとつ考えてくれないか」と言われた。その方はすでに亡くなっているが、言葉はとても記憶に残っている。今回の収蔵庫はそういうこともある程度想定しているが、行政資料となると大量の資料となるのではないかな。

委員)

選別が大事。全て納めるのではないので、何を残すのをきちんと選別すれば納まると思う。

委員)

先ほど話のあった、公共のものを開く、というのは良いこと。このまちはどうあったら良いのか、この施設はどう使ったら良いのか、といったことについて、今居る方、これから来る方、将来住む方など多様な立ち位置の住民から公開の場で意見をいただき、お互いに意見を聞きあい、探しながら話し合う。するとどの意見が本当に良いのかということが、市民の皆さんから湧いてくる、と言うことを何回か経験した。市としてこのように進めるのは非常に大変とは思いますが、こうして話し合ってまとめていくという手法もある。

市長)

行政とはどうしても既得権益にとらわれがち。そういう意味でも公開は大事と思う。

会長)

ほかに何かないですか、では終わらせていただきます。事務局のほうに進行をお返しします。ありがとうございます。

事務局)

ありがとうございました。では以上をもちまして、第22回松阪市政推進会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

《午後5時00分終了》